「活用問題集」を用いた初期指導

――『ジーニアス英和辞典 第３版』を使って

橋本敏郎

■はじめに

本校では，辞書や参考書などの選定はその学年の担任２名が中心となって行っているが，私が担任であった今年の卒業生から現２年生までの３年間，『ジーニアス英和辞典第３版』（G3）を使用してきている。「辞書指導」も各学年に任されているが，１年生の初期にG3の『活用問題集』を使用するなどして使い方を指導している。現在，１年生の担任をしているので，今回は３年前のことと現在のことを混ぜながら書くことになる。また誰もが行っていることで参考になることは少ないと思うが，ご了承願いたい。

■辞書指導の実際

３年前の冬，新入生をどう指導するかをもう１人の担任予定者（英語）と話し合っている時，「最近は辞書を引く経験もなく入学してくる生徒が多い」という噂を耳にしていた。ここに生徒に対するアンケートの結果（当時私たちが不定期で発行していた「英語便り」に掲載したもの）があるが，中学時代に辞書を引かなかった生徒は26％もおり，辞書を持っていなかった者も13％いた。新出単語をどのように調べたかを聞くと，29％が「教科書の後ろで調べた」と答えている。辞書がうまく使えないと，予習はもちろんのこと自学自習も効率的にできない。そこで辞書に強制的に触れさせるため辞書指導をしようということになった。しかし，３年間の進度等を考えると辞書指導に時間をかけることは難しかったので，考えた結果，次の２つを行うことになった。

・「朝学習」の活用

本校では，ＳＨＲ（ショートホームルーム）前の10分間，「朝学習」を行っている。１年次は英国数で２年次後半からは理社も入り，やり方は係の生徒が問題を配付し，解答後自己採点をしてSHR時に担任が回収するという方法で行っている。私たちはこの時間に『活用問題集』を用いることにした。

この『活用問題集』は９課から成っており，１回１課で進めば５月中旬の考査前には終わるだろうと考えていた。しかし，予想は甘すぎた。

第１課は，A「単語を辞書の順に並べる」，B「派生語調べ」，C「熟語調べ」から成っている。回収したものをざっと見ると，大部分がBの途中で終わっていた。朝学習の時間に職員は朝会をしているので生徒たちの取り組みの様子は分からなかったが，入学直後ということから判断すれば，一生懸命取り組んだと思われる。そのときにきちんと検証，指導すればよかったが，結局「問題集」をそのまま配布するのではなく，頑張れば10分で取り組める量に調整をして印刷することにした。

３年前は生徒の取り組み方を見なかったので，今回本稿を書くにあたって，現１年生に同じものをやらせてみた（時期：９月初め，辞書：他社のもの）。まずA～Zを書き出すところでは，アルファベットをブツブツと唱える声やABCの歌が聞こえた。おそらく普段でも頭の中で歌っているのだろう。練習問題Aにも時間がかかっていて，特に４番（telephone / telescope / telepathy / telegraph）に時間をかけているようだった（間違えた生徒もいた）。次にBでは「見出し語って

何？」と数人に聞かれ，解説の必要性を感じた。これが４月の第１週であったとすると，まじめに取り組んでも10分間で半分もできないのは当然である。改善点としては，①最低でも１回目は授業中に行い質問を受ける，②プリントに手書きで「見出し語とは」などの解説を加える，③返却時に解説を行うなどが考えられる。やらせっぱなしではなく，もう少し丁寧に指導する必要があった。

・「辞書引き月間」

短い時間であっても何らかの指導をということで，４月を「辞書引き月間」とし，英語Ⅰで１時間に最低１回は全員で辞書を引く活動をしようということになった。

まず，単語の意味を確認するとき，反意語や派生語なども確認した。初期の頃はそこまで予習している生徒も少なかったので，全員で調べることが多かった。例えば“They are not very clean.”の文ではcleanの項を引かせ，dirtyという語を見つけさせた。また初期段階では，新出単語を調べるときにコンテクストを考えて調べる生徒は少なく，大部分が最初に出ている意味を書き出している。そこで前後関係などから意味を考えさせるためにも辞書を活用した。例えばserious。“These problems are very serious.”という文であるのに「生まじめな」と答える。そこで辞書で「人」の場合と「事態や病気」の場合では異なるということを確認し，最初だけを見るのではなく，説明や例文と照らし合わせて引く必要があるということを伝えた。

熟語を確認するときも辞書を一緒に引いた。“take part in”の同意表現を知るために引かせると，当然であるかのようにtakeを調べ始める。４ページもあるのだから必ずあると疑わず真剣に探す。数人が辞書の真ん中あたりを引き初めた頃に，「そろそろtakeはあきらめろよ」と言うと一斉にpartを探し，“participate in”を見つけていた。辞書を引くには「勘と経験」も必要であることを告げ，私たちでも一発で見つけられないことがあるという話でほっとしたようだった。

trackが出てきた時には，trackの項でtruckとの違いを確認させた。また文型の確認にも活用した。第５文型のmakeが出てきたときには，辞書で第３・４文型を確認するとともに第５文型の補語にはどんな品詞がくるかも一緒に確認した。

辞書引き活動には生徒も一生懸命に取り組んでいたし，眠気防止にも役立っていたようである。そして一緒に辞書を引くことによって，少しずつではあるがどこにどのような情報が載っているかを説明することができ，その後の自学に役立ったのではないかと思われる。改善点としては，やはりきちんとした計画が必要であることはもちろん，朝学習で行った『活用問題集』と関連づけた指導をすることが有効であろう。また，「予習プリント」（考査作成者が作成していた）にこちらが意図した辞書引きができるような項目を設けることも１つの方法だと考える。

■おわりに

最近の学習辞書は，電子辞書も含め生徒の必要としている情報や機能が充実していて「参考書」としても活用ができる。しかし，どのような情報が載っていて，どう見ればいいのかが分からなければ，生徒が持ち運びを嫌がるただの「重い」本である。初期段階では基本的な使い方を集中して指導し，それには『活用問題集』の使用が有効である。しかし，辞書を「参考書」として有効に使えるようになるために２，３年次においての辞書指導も考えなければならないと思う。

最後に生徒の切なる願いを紹介し，締めとしたい。理想の辞書とは？　軽いもの，もっと例文の多いもの，めくりやすいもの，引くのに時間のかからないもの，声に出すだけで調べられるもの，本文に合った意味が出てくるもの，文を入力すると意味や単語，文型の説明をしてくれるもの，そして，一度引いたらすぐに頭に入るもの。

（はしもと　としろう・新潟県立新潟南高等学校教諭）